

論文要約

ベトナム人日本語学習者における

日本語漢字単語の記憶と処理

—越日 2 言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した

実験的検討—

広島大学大学院 教育学研究科

文化教育開発専攻 日本語教育学分野

長野 真澄

I 論文題目

ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の記憶と処理
—越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した実験的検討—

II 論文構成（目次）

第1章 問題と目的

第1節 はじめに

第2節 ベトナム人日本語学習者における漢字や漢字単語の学習

第3節 中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者を対象とした漢字単語処理研究

第4節 問題の所在と本研究の位置付け

第2章 実験的検討

第1節 越日2言語間の音韻類似性調査と検証実験

第2節 漢字単語の意味と読みのテストによる検討【実験1】

第3節 語彙判断課題による検討【実験2】

第4節 読み上げ課題による検討【実験3】

第3章 総合考察

第1節 実験1～3のまとめ

第2節 本研究の意義

第3節 日本語教育への示唆

第4節 今後の課題

引用文献

資 料

謝 辞

Ⅲ 論文要旨

第1章 問題と目的

第1節 はじめに

ベトナム人日本語学習者は、日本語教育の現場において、いわゆる非漢字圏学習者と見なされることが多いが、実際には、その他の非漢字圏学習者と異なる特徴を持つ。それは、母語(native language: first language とほぼ同義として以下, L1)に「漢越語(từ Hán Việt)」と呼ばれる漢語由来の語彙が数多く存在することである。ベトナムでは、20世紀初頭まで公の文章で漢字表記が使用され、それらの漢字はベトナム独自の音で読まれた(川本, 2000)。個々の漢字に対応するベトナム語の音は「漢越音(âm Hán Việt)」と呼ばれ、漢字表記が用いられなくなった現在でも、その音のみが漢越語とともに使用されている。

第二言語(second language: 以下, L2)の単語の記憶には、L1の単語情報が密接に関わるとされる。単語の記憶システムは心内辞書(mental lexicon)と呼ばれ、心内辞書内では、L2の単語情報がL1の単語情報や概念などと関連付けられて符号化され、貯蔵されると考えられている。

L1で漢字表記や漢語由来の語彙を使用する中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者に関しては、L1の漢字や漢語の知識が日本語の漢字単語の記憶と処理に影響を与えることが明らかにされている(e.g., 松見・費・蔡, 2012; 柳本, 2016)。では、ベトナム人日本語学習者の漢字単語の記憶と処理においても、同様にL1の漢越語や漢越音の知識の影響がみられるのだろうか。本研究ではこの問題を扱う。

第2節 ベトナム人日本語学習者における漢字や漢字単語の学習

ベトナム人日本語学習者の漢越語や漢越音の知識に着目した研究は多くない。松田・タン・ゴ・金村・中平・三上(2008)は、旧日本語能力試験の出題範囲にある日本語の漢字2字単語とベトナム語の翻訳同義語との関係性について、ベトナム語の翻訳同義語を漢字に置き換えた場合に日本語単語と使用漢字がどの程度一致しているか、という観点から整理した。その結果、使用漢字が完全に一致するものが全体の35.8%を占め、部分的に一致するものを含めると、全体の50%を超すことが明らかになった。特に、2級以上の語彙で一致度が高かったことから、松田他(2008)は、中級以上の習熟度になると、漢越語の知識が漢字単語の学習に有利に働く可能性があるとして指摘した。

中川・小林(2008)では、漢越語と使用漢字が一致する日本語漢字単語について、ベトナム語と意味・用法が一致する場合、正の転移がみられ、ベトナム語と意味・用法にずれがある場合、負の転移がみられることが示された。また、タン(2003)は、漢字学習ストラテジーについて調査し、ベトナム人日本語学習者は漢字学習において、対応する漢越音

を記憶したり漢越音から意味を類推したりする傾向が強いことを明らかにした。

以上のことから、ベトナム人日本語学習者は、L1の知識を利用しながら漢字や漢字単語の学習を進める傾向があり、漢越語との関係性によって、正または負の転移があることがうかがえる。一方、ベトナム人日本語学習者における漢字単語の処理について検討した研究は管見の限りみられない。そのような中で、L1に漢字表記または漢語由来の語彙を持つ中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者を対象とした漢字単語処理研究は、多くの示唆を与えてくれる。

第3節 中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者を対象とした漢字単語処理研究

中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者を対象とした漢字単語処理研究の多くで理論的枠組みとされているのが、Kroll & Stewart (1994)の改訂階層モデル(revised hierarchical model)である。改訂階層モデルでは、L1と第二言語(second language: 以下、L2)で、語彙表象(lexical representation)は分離し、概念表象(conceptual representation)は共有されているという想定のもと、2言語の語彙表象間の連結、及び各語彙表象と概念表象の連結の強度の差について言及された。近年の中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者を対象とした漢字単語処理研究では、語彙表象について、単語の形態に関する情報が貯蔵されている形態表象(orthographic representation)と、音韻情報が貯蔵されている音韻表象(phonological representation)を区別した上で、漢字単語の処理と、2言語の各表象間の関係が検討され、心内辞書モデルが構築されている。

中国人日本語学習者の心内辞書モデルでは、中国語と日本語(以下、中日)の2言語間で形態類似性が高い単語の形態表象が中日2言語間で共有されていること(蔡・松見, 2009)や、音韻類似性の高い単語の中日の音韻表象間の連結が、音韻類似性の低い単語の音韻表象間の連結に比べて強いこと(e.g., 蔡・費・松見, 2011)が可能性として示された。また、中国人中級日本語学習者を対象として日本語漢字単語の処理過程を検討した松見他(2012)では、日本語の習熟度が中級程度の場合、日本語の音韻表象の形成度が低いため、日本語漢字単語の形態表象と日本語の音韻表象との連結よりも、日本語漢字単語の形態表象と中国語の音韻表象との連結のほうが強いことが指摘された。

一方、L1で漢字表記をほとんど使用しないものの、漢語由来の単語を多く持つ韓国人日本語学習者に関しては、松島(2013)が、心内辞書において、音韻類似性が高い単語は韓国語と日本語(以下、韓日)の音韻表象間の連結が強く、韓国語の音韻表象の活性化が、日本語の音韻表象の活性化を促進することを示した。また、柳本(2016)では、韓日の2言語間で字体が同じ単語は日本語の形態表象と韓国語の音韻表象との連結が強いことが示された。中国人日本語学習者を対象とした研究(e.g., 松見他, 2012)と、韓国人日本語学習者を対象とした研究(e.g., 松島, 2013; 柳本, 2016)では、単語材料の操作の仕方が異なり、単純に比較はできないが、いずれにおいてもL1の音韻表象の迅速な活性化が、視覚呈示された日本語漢字単語の意味処理や音韻処理に影響を及ぼすといえる。

第 4 節 問題の所在と本研究の位置付け

中川・小林 (2008) やタン (2003) から、ベトナム人日本語学習者の漢字単語の記憶において、L1 の漢越語や漢越音が何らかの影響を及ぼす可能性が高いと考えられるが、具体的にどういった要因がどのように影響するかは不明な点が多い。また、ベトナム人日本語学習者の漢字単語の処理に関する情報は極めて少ない。本研究では、以下の 2 つの研究課題を設定し、ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の記憶と処理について検討する。

【研究課題 1】ベトナム人日本語学習者が日本語漢字単語を記憶する際、符号化の段階で L1 の漢越語や漢越音の知識がどう影響するかについて明らかにする。また、漢字単語と漢越音の対応に関する知識の個人差や単語属性による差について探索的に検討する。

【研究課題 2】L1 の漢越語や漢越音の知識が日本語漢字単語の処理に与える影響について検討する。また、ベトナム人日本語学習者の心内辞書における表象間の関係について、中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者を対象とした先行研究の結果と比較しながら明らかにする。

これら 2 つの研究課題を検討するために、日本の大学で学ぶベトナム人日本語学習者を対象に、ベトナム語と日本語 (以下、越日) の 2 言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作して実験を行う。使用漢字の異同は、松田他 (2008) に基づき、越日 2 言語間の翻訳同義語において使用漢字が完全に一致する語を「同形語」とし、使用漢字が全く一致しない単語を「異形語」とする。また、音韻類似性については、実験に先立って越日 2 言語間の音韻類似性に関する調査・検証を行い、その基礎資料に基づいて操作する。

第 2 章 実験的検討

第 1 節 越日 2 言語間の音韻類似性調査と検証実験

実験に先立ち、日本語学習経験のないベトナム語 L1 話者を対象に、越日 2 言語間の音韻類似性調査を行った。調査参加者は、同形語 110 語と異形語 110 語について、対応する漢越音との音韻類似性を 7 段階で評定するように求められた。その結果をもとに、各単語の平均評定値を算出して一覧にし、音韻類似性に関する基礎資料を作成した。

次に、音韻類似性の調査結果の信頼性を検証するために、日本語能力試験 N2 を取得したベトナム人日本語学習者を対象とし、基礎資料に基づき音韻類似性を操作した単語材料を用いて、学習実験を行った。実験参加者は、コンピュータ画面にランダムに視覚呈示される漢字単語について繰り返し「つぶやき読み」を行い、覚えるように教示された。その後、介入課題を挟み、単語の再生テストが行われた。再生テストの結果、音韻類似性の高い単語のほうが音韻類似性の低い単語よりも、再生成績が高かった。音韻類似性の高低によって再生成績に差が生じたことから、調査で得られた音韻類似性の平均評定値は、信頼できるものだといえる。

第2節 漢字単語の読みと意味のテストによる検討【実験1】

実験1では、ベトナム人日本語学習者における漢字単語の記憶について、(1) 越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性が漢字単語の読みと意味の符号化に与える影響、及び(2) 漢字単語と漢越音の対応に関する知識内での単語属性による差と個人差、の2点を検討した。実験では、N1またはN2を取得したベトナム人日本語学習者を対象に、使用漢字の異同と音韻類似性を操作した漢字単語を用いて、漢字単語の読みと意味、そして漢越音での読み方を書かせるテストを行った。その結果、漢字単語の読みと意味において、同形語の得点が、異形語の得点よりも高く、使用漢字の一致が漢字単語の読みと意味の符号化を促進する可能性が示された。また、漢字単語と漢越音の対応に関する知識については、単語属性による差と個人差が大きいことが明らかになった。個人差が大きかったことから、漢越音の得点をもとに上位群と下位群に分けて分析した結果、上位群は、漢字単語の学習の手掛かりとなり得る同形語と、異形で音韻類似性が高い単語については、意識的に漢字単語に対応する漢越音を記憶し、学習の際に利用していることがうかがえた。一方、下位群は、その得点の低さから、漢字単語と漢越音の対応を意識的に記憶することはなく、偶発的に対応を知ったものについてのみ覚えている程度であることが推察された。

第3節 語彙判断課題による検討【実験2】

実験2では、越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性が漢字単語の意味処理に及ぼす影響を検討するために、漢字単語と漢越音の対応について十分な知識がある、N2を取得したベトナム人日本語学習者を対象として、語彙判断課題を用いた実験を行った。Yes 試行用の単語材料は実験1と同様であり、No 試行用に漢字2字からなる非単語を作成した。実験の結果、音韻類似性による促進効果がみられ、日本語漢字単語の意味処理に、ベトナム語の音韻表象の活性化が影響することが示された。他方、使用漢字の異同の主効果と交互作用はみられなかった。これらの結果から、漢字単語が視覚呈示されると、使用漢字の異同にかかわらず、日本語の形態表象から日本語の音韻表象へのアクセスが生じ、音韻類似性が高い単語においては、そこからベトナム語の音韻表象も活性化し、意味処理が促進されることが示唆された。

第4節 読み上げ課題による検討【実験3】

実験3では、越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性が漢字単語の音韻処理に及ぼす影響を検討するために、N2を取得したベトナム人日本語学習者を対象に、読み上げ課題を用いた実験を行った。実験材料は実験1と同様であった。実験の結果、使用漢字の異同の主効果は有意ではなく、音韻類似性の主効果と交互作用が有意であり、異形で音韻類似性が低い単語の読み上げ反応時間が他の単語属性の反応時間に比べて長いことがわかった。これは、ベトナム人日本語学習者が漢字単語の音声出力を求められた場合、使用漢字の異同にかかわらず、日本語の形態表象から日本語の音韻表象にアクセスし、ベトナム語の音

韻表象の活性化を受けずに音声出力がなされることを示唆する。その中で、異形で音韻類似性の低い単語は、他の単語属性と異なり、符号化の段階で L1 の情報を手掛かりとすることができないことから、他の単語属性に比べて音韻表象の形成度が低い可能性が示された。

第3章 総合考察

第1節 実験1～3のまとめ

実験1の結果から、研究課題1に対する回答として次のことがいえる。まず、ベトナム人日本語学習者の漢字単語の記憶において、越日2言語間で使用漢字が一致することが符号化を促進する可能性がある。それは、使用漢字が一致する同形語は、漢越音を介して、すでに心内辞書内にあるベトナム語の翻訳同義語の音韻や意味と結び付けやすく、精緻化がなされやすいためだと考えられる。また、漢字単語と漢越音の対応の知識については、単語属性による差と個人差が大きいことが示された。

研究課題2については、実験2と実験3の結果から、ベトナム人日本語学習者の漢字単語の処理に、L1の漢越語や漢越音の知識が影響することがわかった。具体的には、意味処理において、越日2言語間の音韻類似性による促進効果がみられることが明らかになった。また、日本語の音声出力の際には、L1との類似性に乏しい、異形で音韻類似性の低い単語の処理が遅れることが示された。さらに、ベトナム人日本語学習者の心内辞書について、中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者との共通点と相違点が明らかにされた。共通点は、L1とL2の音韻類似性が高い場合に、相互の音韻表象の連結が強いことである。相違点は、日本語の形態表象と、L1またはL2の音韻表象との連結の相対的な強さである。中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者では、単語属性によっては日本語の形態表象とL1の音韻表象の連結が強く、その連結を通じて、L1の音韻表象の活性化が漢字単語の処理に影響するが、ベトナム人日本語学習者の場合、単語属性にかかわらず、日本語の形態表象は日本語の音韻表象との連結が強いことが示された。

第2節 本研究の意義

本研究の意義として、これまで不明な点が多かったベトナム人日本語学習者の漢字単語の記憶と処理について、新たな情報を提供できたことが挙げられる。これまでベトナム人日本語学習者を対象とした漢字単語の記憶や処理に関する研究は少なく、L1の漢越語や漢越音の知識が具体的にどう影響するか、という点については未解明であった。本研究は、この点について実証的に検討し、漢字単語の記憶と処理にL1の知識がどのように関わるかを明らかにした点で意義があるといえる。

第3節 日本語教育への示唆

本研究の結果から、以下のような教育的示唆が導出できる。

実験 1 の結果から、漢越音は、特に同形語において記憶の有効な手掛かりになることがわかった。ベトナム人日本語学習者が漢字の形態と読み方と意味を同時に覚え、しかも漢越音との対応も覚える、というのは、一度に行うと認知的な負担が大きいと考えられる。しかし、学習者の環境や習熟度、興味などを考慮しつつ、教師の工夫によって、実際に教室内で漢越音との対応を指導することができれば、ベトナム人日本語学習者の漢字単語学習は、特に同形語の場合に促進される可能性が高いといえる。

実験 1 及び実験 3 の結果から、ベトナム人日本語学習者において、ベトナム語の翻訳同義語と使用漢字が異なり、かつ音韻類似性が低い漢字単語は、他の単語属性に比べて、L1 の情報を手掛かりとすることができないため、記憶と処理の両方がうまく進まない可能性が示された。よって、そのような漢字単語の学習場面では、教師も学習者も、L1 以外の情報が活用できないかどうかを考える必要がある。

第 4 節 今後の課題

本研究の発展課題として、以下の 3 つが挙げられる。

1. ベトナム人日本語学習者の漢字単語学習について、漢越音の利用程度の個人差と、その背景を調べるために、個々の学習者がどのように漢字単語を学び、漢字単語学習に関してどのような意識を持っているのか、といった点に関して、質的な分析を積み重ねることである。
2. ベトナム人上級日本語学習者における漢字単語処理と心内辞書の表象間関係について検討し、習熟度の向上による変容を明らかにすることである。
3. 聴覚呈示された漢字単語の処理過程について検討し、視覚呈示事態の処理過程と合わせて、中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者における処理過程と比較し、心内辞書モデルを精査することである。

引用文献

- 蔡 鳳香・費 曉東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討—」『広島大学日本語教育研究』 21, 55-62.
- 蔡 鳳香・松見法男 (2009). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討—」『日本語教育』 141, 14-24.
- 川本邦衛 (2000). 「ベトナムの漢字文化—伝統と現在」戸川芳郎 (編)『漢字の潮流』 (pp.26-32), 山川出版社
- Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory

representations. *Journal of Memory and Language*, 33, 149-174.

- 松田真希子・タン ティ キム テュエン・ゴ ミン トウイ・金村久美・中平勝子・三上喜貴 (2008). 「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか—日越漢字語の一致度に基づく分析—」『世界の日本語教育』 18, 21-33.
- 松見法男・費 暁東・蔡 鳳香 (2012). 「日本語漢字単語の処理過程—中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討—」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編著)『第二言語習得研究と言語教育』 第 1 部 論文 2 (pp.43-67), くろしお出版
- 松島弘枝 (2013). 「漢字と語彙の習熟度が異なる韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—2 字単語の形態・音韻類似性を操作した読み上げ課題による検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』 62, 281-290.
- 中川康弘・小林 学 (2008). 「ベトナム人日本語学習者の漢越語知識と漢字語彙習得についての一考察—現地における正誤判断テストとインタビュー調査から—」『桜美林言語教育論叢』 4, 75-91.
- タン ティ キム テュエン (2003). 「ベトナム人日本語学習者の漢字学習ストラテジー」未刊行修士論文, 東京外国語大学 (Than Thi Kim Tuyen (2006). 「ベトナム人日本語学習者の漢字学習ストラテジー」『外国語大学の論集』(ベトナム) に再録)
- 柳本大地 (2016). 「韓国国内の韓国人上級日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知—韓日 2 言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』 65, 221-226.